

パブリック空間の本

公共性をもった空間の今までとこれから

今村雅樹

小泉雅生

高橋晶子



パブリック空間の本

公共性をもった空間の今までとこれから

今村雅樹

小泉雅生

高橋晶子

彰国社

はじめに

昨今のテレビ番組の影響もあるのだろう、建築学科に入学を希望してくる高校生たちからは、住宅設計を将来の仕事としたいという声が多い。彼らはどうやら「建築家とは住宅を設計する人」と勘違いしているようだ。建築を勉強するならば、ぜひ、建築の幅の広さと奥の深さを学び、社会と建築のあり方を考え続けてほしいと願う。そのためにも、「パブリック性をもった空間」や「公共性をもった建築」と呼ばれる、不特定多数や多様な特定多数の社会で共有する空間を主題にした、しかも建築設計や建築計画に繋がる視点でまとめられたテキストが欲しいと思っていた。

国民の税金で施工される官製のものづくりが「ハコモノ」と批判されて久しいが、官製の「公共建築」と呼ばれるビルディングタイプのみがパブリック性をもった空間ではない。民間による「公共性の高い空間」も数多く出現しており、官/民やビルディングタイプでの選別や、建築の教え方には限界があるという現代的な疑問も、この本をまとめるきっかけとなった。調べてみると、歴史的にもそして国によっても、パブリック性をもった空間のあり方やつくられ方に多様性が見られる。特に現代は、20世紀の機能的分類による「公共建築」の考え方では取まらなくなっている。建築士の試験課題にさえも「コンプレックス（用途の複合体）」と呼ばれる建築類が多く出題されるようになり、複雑な現代社会に貢献する、新しいパブリック性をもった建築像の要求が見え隠れしている。

本書では、こうしたパブリック性をもった空間の変容をとらえ、その諸相をつかむ視点を提示することに留意した。第1章「パブリック空間の系譜」、第2章「パブリック空間のつくられ方と使われ方」、第3章「パブリック空間の読み取り方」、第4章「プライベート空間の中に現れるパブリック空間」、第5章「パブリック空間の設計手法」という構成で、パブリック性をもった空間の歴史的、空間的系譜から設計手法までをわかりやすく解説している。さらに考えを深めたいという読者のガイドとして、付章「パブリック空間をめぐる論考と視点」で既往の研究や著述を紹介している。各章の冒頭には、読者になぞらえた“ケンチ君”のエピソードを挿入している。その章で何をつかんでほしいかのヒントになるだろう。

21世紀に入ってすでに十数年が過ぎようとしているが、時代や場所とともに「パブリック」の持つ意味や価値さえも変わってきている。これまでの20世紀型「公共」とは違う、「変容するパブリックに対応する建築」のあり方を探り続けていきたい。

2013年6月

著者代表 今村雅樹

デザイン：水野哲也 (Watermark)

カバー表紙写真：Bernhard Lang/gettyimages

はじめに 3

序 8

■ 第1章 パブリック空間の系譜 11

1-1 パブリック空間の原型 12

- 1) ゲニウス・ロキ
- 2) 「集落と広場」から始まったパブリック空間

1-2 統治と宗教から生まれたパブリック空間 14

- 1) 統治制度とオープンスペース
- 2) 宗教と集落・都市の形

1-3 社会の変革と工業化が生み出したパブリック空間 18

- 1) 産業社会の実験的職住空間がつくるパブリック
- 2) 商業と交通の発達

1-4 理想の新都市像と計画されるパブリック空間 20

- 1) 理想の居住都市
- 2) 新都市像が生んだ機能分類型パブリック空間

1-5 互助の精神が生んだ近代日本のパブリック空間 23

- 1) 地域が支えた地域的パブリック
- 2) 篤志家による自主・寄付が生んだ「公共建築」

1-6 都市復興期に生まれたパブリック空間 26

- 1) 政治施策による公共
- 2) パブリック空間の大改造

1-7 アーバンデザインとリージョナリズムにより開花した パブリック空間 30

- 1) 都市デザイナーの登場
- 2) 地域性の特化：リージョナリズム

1-8 変容と再生を続ける現代のパブリック空間 33

- 1) 新しい社会に対応するパブリック空間：機能複合化（コンプレックス）
- 2) ストックを未来に生かすパブリック空間：用途変更（コンバージョン）
建築から建築へ インフラ構築物からパブリック空間へ

■ 第2章 パブリック空間のつくり方と 使われ方 41

2-1 パブリック空間のつくり方 42

- 1) つくる主体と目的
「官」による制度に基づく整備
「アソシエーション」によるビジョンの達成
民間企業によるCI・広告・宣伝
個人による地縁・コミュニティのきっかけづくり
- 2) つくる手法・プロセス
参加型設計プロセス——プロセスの可視化
民間活力の導入——PPP・PFI・指定管理者制度
時系列を伴う群的整備

2-2 パブリック空間の使われ方 55

- 1) 行き交う
- 2) 佇む
- 3) 集う
- 4) 癒す
- 5) 学ぶ
- 6) 商う（飲食・買い物）
- 7) 暖まる・涼む（気候変動からのシェルター）
- 8) 見る・鑑賞する

■ 第3章 パブリック空間の読み取り方 75

パブリック空間のノーテーション 76

- 1) 領域によるパブリック空間の記述
- 2) 流れによるパブリック空間の記述
- 3) 表層によるパブリック空間の記述
- 4) 境界・アクセシビリティによるパブリック空間の記述
- 5) パブリック空間での心理の記述
- 6) パブリック空間における体験の記述
- 7) パブリック空間における現象の記述

■ 第4章 プライベート空間のなかに現れるパブリック空間 ⁸⁷

4-1 プライベート空間のなかに現れるパブリック ⁸⁸

- 1) 一時的転用が生むパブリック性をもった空間
- 2) 併設が生むパブリック性をもった空間
- 3) 集合が生むパブリック性をもった空間

4-2 パブリック空間に滲みだすプライベート ⁹⁴

- 1) パブリック空間に現れるプライベートな行為
- 2) パブリック空間とプライベート空間の境界
- 3) 意識のレベルで変容するパブリック性

■ 第5章 パブリック空間の設計手法 ¹⁰³

- 事例:1 戸田市立芦原小学校 ¹⁰⁴
 事例:2 象の鼻パーク／テラス ¹¹⁸
 事例:3 西合志町保健福祉センター ¹²⁴
 事例:4 石田眼科 ¹³⁸
 事例:5 芦北町交流センター ¹⁴⁴
 事例:6 佐川町立桜座 ¹⁵⁶

■ 付章 パブリック空間をめぐる論考と視点 ¹⁶⁵

- 1 社会学における公共性
- 2 建築計画学におけるパブリック・コモン
- 3 コンテキストから見たパブリック空間
- 4 新しい公共性・小さな公共性

- Column パブリック空間とは? 7 / 阿波の農村舞台 ¹⁰
 野球場のつくられ方: 日米の違いはどこからくる? ⁴⁰
 河川敷とドラえもんの空き地: 使われ方 ⁵⁴
 俯瞰とアイレベル ⁷⁴ / 住宅からできること ⁸⁶ / 読むとつくるは大違い ¹⁰²

パブリック空間とは?

大学で建築を学んでいるケンチ君は、「具体的なパブリック空間を1つ挙げてその性格を記述せよ」というレポートを課され、同時に設計演習で「パブリックスペース」という課題を出された。意識してパブリック空間のことを考えたりしたことがなかったケンチ君だが、身近なところから事例をピックアップしてみた。

まず、パブリックという単語から公共という単語を連想した彼は、いわゆる公共建築を思い浮かべた。「成人式の日、20歳の面々で大いに賑わっていた近くの区立会館ならよく知っている。時折行く美術館も祖父がデイケアに通っている福祉施設も自治体が管理運営している施設だ。税金でつくられている公共建築はパブリック空間の代表のようなものだろう。」

次に浮かんだのは、ケンチ君にとって最もなじみのある大学キャンパスだった。大学は学びの場でもあり、友人や先輩、教職員との出会いと交流の場でもある。それに加えて、駅にも住宅地にも近いキャンパス空間は散策を楽しむ場として人気があり、近隣の人びとも花見や芝生の庭でゆったりするために頻りに訪れる。公園のようにそこを自由に歩いたり体験したりできるのだ。もちろん教室やゼミ室は一般の人は普通に入れるとはいえないし、セキュリティがかけられ関係者以外立ち入れない場所もある。でも、大きくとらえると大学キャンパスはパブリック空間だろうと彼は思った。

ケンチ君はさらに、コンビニエンスストアを思いついた。ちょっとしたものを買いたいとか、少しだけ時間をつぶすときにとても便利だし、いろいろな世代の人びとが入り込んでいて、なくてはならない場である。東日本大震災直後にコンビニが移動販売や仮設店舗で営業開始したことは人びとを勇気づけるニュースだった。公共建築とは違って民間経営の商業施設だがみんなの役に立っている。パブリック空間といっても少しづつ違った意味合いでいろいろあるものだなと、ケンチ君は意識した。

彼はアルバイトで通っている建築家の個人事務所のことも思い出した。街路に面しガラス張りの打合せスペースがあって、昼間はカフェとして街に開いてもいる。膨大な専門書もそこで読むことができ、個人の職場でもありカフェでもある、小さいけどパブリックな空間だ。

「事例は1つ」といわれている。ケンチ君は何を選び何をいおうかと思いを巡らせた。

序 パブリック空間と公共性

まず、本書で述べる「パブリック性をもった空間」についての説明をしておく必要がある。パブリックに繋がる「公共性」という言葉の意味合いを、政治思想史を専門とする齋藤純一は次のように整理している。^{*1}

- (1) 国家に関係する公的なもの (official)
- (2) 特定の誰かにではなく、すべての人びとに関係する共通のもの (common)
- (3) 誰に対しても開かれている (open)

「公共性」の本質として明快で、理解しやすい整理といえよう。この3つの「公共性」は互いに抗争する状況もある、としている。

すなわち、

- (1) ⇔ (2) 公共機関による公共事業は時に、共通の利益 (公益性) が疑わしい。
- (1) ⇔ (3) 国家の活動は時に、強く公開性を拒もうとする。
- (2) ⇔ (3) すべての人に共通のものとするためにサービスを一定の範囲に制限せざるを得ず、閉ざされていないことと衝突する (たとえば、義務教育が行きわたるように学区が設定され、そのためにその学校は学区外に対しては閉ざされる：筆者例示)。

といった事例が考えられる。

ここから考察を進めると、つまるところ、先の3つの意味合いはある程度独立しており、どれかが欠けていたとしても「公共性」は決定的に損なわれるわけではない。「公共性」という言葉で示される中にいくつかの方向性があり、「公共性」を一意に定めるのは困難といえよう。

この「公共性」の概念はそのまま「パブリック空間」に置換可能だろう。

すなわち、

- ① 国家や行政に関係する公的な (サービスが提供される) 空間 (official space)
- ② 特定の誰かにではなく、広い範囲の人びとに関係する共通の空間 (common space)
- ③ 多くの人びとに対しても開かれている空間 (open space)

ここで②、③に若干の修正を加えた。空間という広がり of 制約の下では、「すべての人びとに」はなかなか現実的ではない。「広い範囲の人びと」「多くの人びと」とアレンジしている。パブリック空間においてもまた、①、②、③は相反するケースが出てくる。

- ① ⇔ ② 公営住宅は収入等の入居制限があり、限られた人びとしか入居できない。
- ① ⇔ ③ 公立の学校建築において、安全性の観点から門扉が閉ざされる。
- ② ⇔ ③ 新宿西口の広場で、段ボールハウスが撤去されホームレスが排除される。

このように考えると、①、②、③のうちいずれかが欠けていたとしても、空間のパブリック性が決定的に損ねられるわけではない。やはり「パブリック空間」も一意には定まらない。

ここで③の「開かれている」は、建築においては、物理的に開かれていて「訪れることができる」といった意味合いと、視覚的に開かれていて「公開されている」との2つの意味合いがあろう。「公開されている」は、Publicから派生したpublishという概念ともリンクするものである。

さらに、ここで②と③を重ね合わせて考えてみたい。「誰に対しても開かれており、広い範囲の人びとに関係する空間」が浮かび上がってくる。これは、いうなればより積極的に「関係づけていく」、すなわち「つなぐ」役割を果たす空間といえよう。付章で後述する政治思想家ハンナ・アレントは、公的領域の役割を「人びとを結びつけると同時に人びとを分離させる」と説明している。パブリック空間には「つなぐ」という意味合いもあるだろう。先の3つに加えて

- ④ 間にいる人びとを繋ぐ空間 (connecting space)

というものを位置づけたい。

本書で扱う「パブリック空間」とは、これら①、②、③、④およびそれらが複合したものを扱うこととなる。

- ① 国家や行政に関係する公的な (サービスが提供される) 空間 (official space)
- ② 特定の誰かにではなく、広い範囲の人びとに関係する共通の空間 (common space)
- ③ 多くの人びとに対して物理的にもしくは視覚的に開かれている空間 (open space)
- ④ 間にいる人びとを繋ぐ空間 (connecting space)

となる。さらに、これらの特性をもつ可能性のある空間を「パブリック性をもった空間」として、あわせて採り上げていく。

範囲が広く曖昧に感じられるかもしれない。これは、先に述べた多義的な意味合いを持つ「公共性」の宿命である。広範囲を対象とすることで、多様なパブリック性が浮かび上がってくることを期待している。

*1 『公共性 publicness』齋藤純一 岩波書店 2000年

■現代の私たちを取り巻くパブリック性をもった空間が、

どのような場所に発生し歴史の中でどのようにその性格が変わってきたのか。

本章では場所と時間を追いながら、パブリック空間のあり方やつくられ方を考察してみる。

時代とともに、また国や民族や宗教等の違いによって、「パブリック空間」と一口に言っても

その多様さを垣間見ることができ、今後のパブリック空間のあり様を創造する参考になるだろう。



Fig.1-1 三輪山信仰(奈良)
三輪山そのものを御神体とした、日本最古の神社(大神神社)の大鳥居。



Fig.1-2 モンセラット
カタルーニア地方のキリスト教の聖地。



Fig.1-3 モン・サン＝ミッシェル
潮の満引きによって島と本土が繋がり、道ができる。

1-1 パブリック空間の原型

1) ゲニウス・ロキ

われわれ人類の祖先たちは、動物的にも、群れをなして生活を行ってきた。人類の発生当初から集まって生活をする中で、自然への畏敬とともに動物的に感じる霊場として、「パブリック性をもつ空間」を大切にきた痕跡が世界中に見られる。古くは自然崇拝的なアニミズムの空間として、日本では「ひもろぎ」空間や「御神体」などに象徴される山岳信仰(例:奈良三輪山信仰)に見られるように、海や川が生んだ地形に寄り添った自然と不可分の生活から、パワースポットとして突出した「場」を見出していた。

西洋でも、スペインのモンセラットの奇岩山やフランスのモン・サン＝ミッシェルの岩山島など、キリスト教の聖地となる以前から、先住民族ケルト人たちは信仰や崇拝の対象として自然を見出し、人が集まる場をつくっていた。その後民族や宗教が替わっていても、常に人びとをその場に集めてきた歴史がある。洋の東西を問わず、これらの場所は、自然がつくり上げた造形により獲得された、ある種独特な「パブリック性をもつ場や空間」が原型として存在し、その後人びとが手を入れ、人を集めるパブリック空間として発展してきたといえるであろう。

現代の日本本土では、このように生活を支配するような霊場的パブリック性をもつ場が少なくなっているが、沖縄では「御嶽(ウタキ)」と呼ばれる自然崇拝の空間が、今でも人びとの生活の中に大切に息づいている。宮崎駿の映画の中にもこのような自然への畏敬と現代社会への警鐘が多く示唆されているが、この「ウタキ」空間には、皆で大切にしていこうとするパブリック性の認識が継承されている。

このようなゲニウス・ロキ*1がつくり出す「場」は、人類共通のプリミティブで精神文化に支えられたパブリックの原型でもあり、後に人間が計画して複雑につくり上げてきたパブリック空間とはあきらかに違う、哲学的で宗教的な性格を持つ空間である。

2) 「集落と広場」から始まったパブリック空間

日本の原始集落に見られるパブリック性をもった空間は、縄文や弥生時代の共同生活の痕跡から計り知ることができる。縄文時代の岩手・西田遺跡と弥生時代の佐賀・吉野ヶ里遺跡(BC3C~AD3C)などの共同体からすでに、日本のプリミティブな集落は環状集落*2や環濠集落と呼ばれる集落配置形態を持っており、きちんと統治されていた社会の中にパブリック空間が存在していたことがわかる。

縄文時代に見られる中心広場は集団墓地を配し、その周囲を同心円状に堅穴式住居群が囲む環状集落であった。これに対し、弥生時代の環濠集落の中心広場には、主祭殿や物見櫓、穀物倉庫などの共同体として重要な施設やパブリック性のある空間が配されていた。プリミティブな集落からムラとなり、クニへと、パブリックの規模が大きくなっていくにつれ、それに見合うように空間のヒエラルキーも明確になっていったと考えられる。

中世になると、奈良・大和郡山稗田村の環濠集落の空間構成に見られるように、原始性を持ち自然発生的だった環状集落や環濠集落から、マチの骨格をもつ都市的空間の発生を見ることができる。

「大和盆地では、大化の改新(756年)後に施行された条里制によ

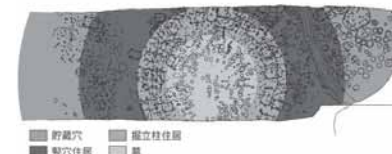


Fig.1-5 西田遺跡(岩手)
縄文時代前期に生まれた環状集落は、最初は数軒だった住居が、中期になると数十軒にまで増え、ドングリの森は大所帯の食料が十分に賄えるほど成長していた。そして人びとは、大人数で暮していく術を身につけ、単なる数家族の集団ではなく、社会が形づくられていった(埼玉県比企郡嵐山町作成資料より)。

Fig.1-6 吉野ヶ里遺跡(佐賀)
弥生時代の大規模な環濠集落で、約50ヘクタールにおよぶ遺構。環濠の中央に主祭殿、奥は物見櫓、手前は堅穴式住居。

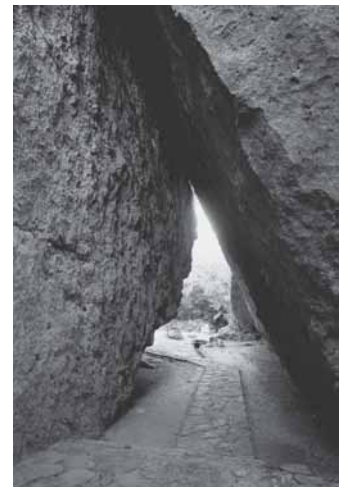


Fig.1-4 ウタキ(沖縄)
斎場御嶽、地域の人によって守られノロと呼ばれる女司祭によって取り仕切られる。

*1 ゲニウス・ロキ(ラテン語:Genius Loci) 語源はラテン語のGenius(生む人)Loci(場所、土地)からきており、土地霊を指す。転じて、ある土地からインスピレーションを連想させるものといった概念に使われるようになった。古くはビクチャレスクの建築の発想に用いられたが、今日でも、有機的建築やコンテクスチュアリズムの傾向の中に、ゲニウス・ロキの概念が垣間見られる(『建築大辞典』彰国社)。

*2 環状集落
中央に広場と集団墓地を設け、そのまわりに堅穴住居を環状・同心円状に配置した、縄文時代集落の典型的な形。縄文時代前期~後期の集団の拠点的な集落(『大辞林』三省堂)。



Fig.1-7 環濠集落(奈良大和郡山稗田)
Google Earth Image ©2012 Digital Globe, Image ©2012 Geo Eye
今も集落周辺を囲う水路により、外形が守られている。



Fig.1-35 パサージュ ガラリー・ヴェロ・ドダ (パリ) 入口外観。レ・アール広場のそばに、ヴェロとドダの2人の豚肉加工業者がつくったパサージュ (1826)。

※4 パサージュ論

ヴァルター・ベンヤミン (1892~1940) 文芸評論家、思想家、翻訳家、社会学者) による。ドイツ系ユダヤ人としてナチスに追われたため最終原稿は不明であるが、パリ国立図書館に隠された原稿などを集積して、パサージュ論は成立している。「パリ19世紀の首都」「パサージュ、流行品店、流行品店員」「モード」等の覚書きと当時の書物引用資料から構築された。



Fig.1-36 ガレリア内部



Fig.1-37 ガレリア (ミラノ) ガレリア入口 (左手) とドゥーモ広場

時代とともに変容し続けている。

また19世紀前半のパリ中心部では、パサージュと呼ばれる、鉄とガラス屋根でつくられたアーケードの通抜け商業空間がいくつも出現した。この空間は百貨店というビルディングタイプの前身となるが、パリが生み出した「人びとが歩く」という行為の中にウィンドウショッピング等の新しい楽しみを付加した、都市型パブリック空間の出現といえるであろう。この背景には産業革命 (工業化) による鉄とガラスの産物があり、1851年のロンドン万博においては鉄とガラスによる巨大空間の水晶宮 (ジョセフ・パクストン) が出現、さらにその後のパリ万博では、自動車やエレベータに続きエスカレータも展示され、都市の交通道路事情とペデストリアン空間のあり方に大きく影響を与えた。20世紀初期の社会思想家のヴァルター・ベンヤミンは、パサージュ論^{*4}で、この19世紀から20世紀のパリの街並みの変遷や歴史について、断片を散文的に網羅した考察を行っている。

また、イタリア・ミラノのドゥーモ広場からスカラ広場へと通じる商業的な立地には、ガレリア (1865~1877) と呼ばれるアーケード型歩行者広場・ショッピングモールの原型が竣工した。産業革命によってもたらされた鉄とガラスのアーチ状の屋根による、パサージュやガレリアといった半屋外の商業的パブリック空間は、ベルギー・ブリュッセルのギャラリー・サン・チュベール (1847)、ロシアのサンクトペテルブルクのパサージュ (1848) など、同時多発的にヨーロッパに出現している。

1-4 理想の新都市像と計画されるパブリック空間

1) 理想の居住都市

ヨーロッパでは、近代化のプロセスにおいて都市への提案が計画的

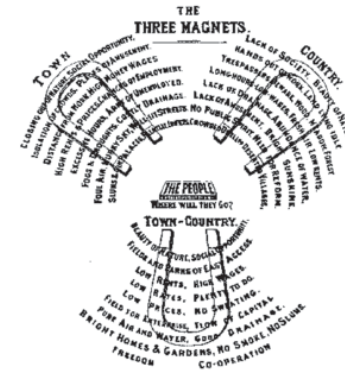


Fig.1-38 田園都市論 エベネザー・ハワード (1850-1928) 都市と農村の長所を融合させた田園都市論の全体コンセプト (3つの磁石: TOWN/COUNTRY/TOWN-COUNTRY)

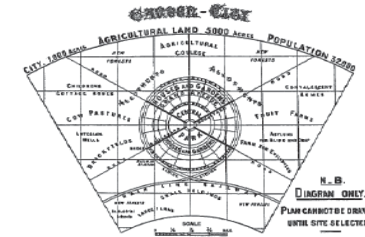


Fig.1-39 田園都市論 地域全体のダイアグラム

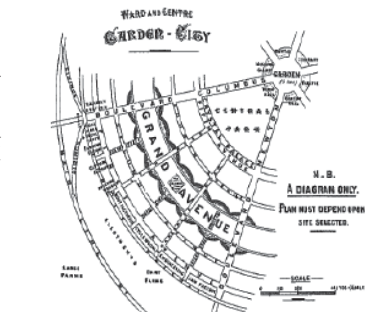


Fig.1-40 田園都市論 街区構成の基本図

理論として発表されるようになり、その理論が実験的に実現されていった。そこでのパブリック空間の中心は、計画的なコミュニティ単位の設定やパブリック性のある空間に貢献する建築 (ビルディングタイプ) の設え方等で、新たな都市像が機能性と居住性を中心に提案されていった。

イギリスのエベネザー・ハワード (Ebenezer Howard) が1898年に発表した著書『明日の田園都市』では、田園都市論が提唱されている。その計画は、人口3万人規模の、自然と共生し、職住近接で自立し、緑に溢れた環境の、都市と農村の長所を融合させた「田園都市」を、大都市周辺に建設するという提案である。すべての土地はコミュニティの共同所有で、市街地の中心には円形広場を中心とした中央公園があり、その中に劇場・美術館・図書館・音楽堂・市役所等が配置され、公園外縁周には水晶宮と呼ぶガラスアーケードの商店などが配置された計画である。パブリック性のある空間がまちづくりの中心として随所に計画されている。実際に1903年ロンドン郊外のレッチワースに創造され、1920年には2つ目の田園都市、ウェリン・ガーデン・シティがつけられた。

アメリカでもこの田園都市運動に影響を受け、1909年、ニューヨーク郊外にフォレスト・ヒルズ・ガーデンズがクレランス・A・ベリ

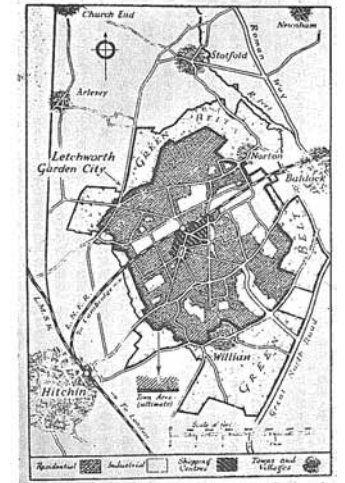


Fig.1-41 田園都市論実例 レッチワース配置計画

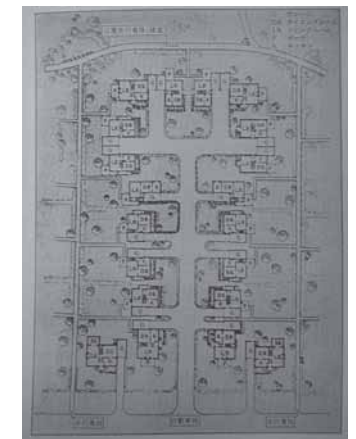


Fig.1-42 近隣住区論の実例・ラドバーン 歩車分離の地区計画のクルドサク (行止まりの袋小路になった車道)



Fig.1-43 近隣住区 6原則に沿った、1小学校区のコミュニティ単位

*3 『街並みの美学』
芦原義信 岩波書店 1990

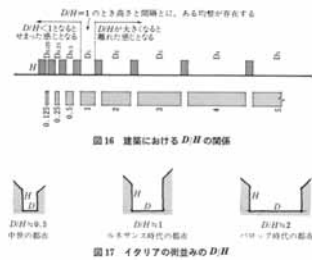
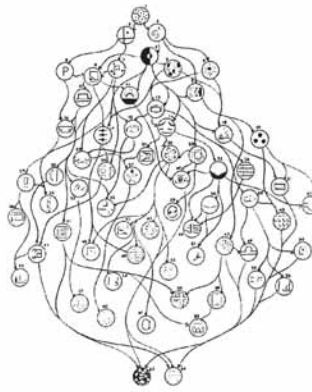


Fig. 3-9 D/H

*4 D/H (ディーバイエイチ)
道路幅員 (D) と沿道の建物高さ (H) との比。これが小さいと圧迫感があり、大きすぎると茫洋としてしまう。



『パターン・ランゲージ』の概念図。一番上の「1 スモール・ターゲット・エリア」から「パターン・ランゲージ」をはじめると、最終的に一番下の「63 光のたまり場」あるいは「64 種かい色」において、建築のデザインが完成する

Fig. 3-10 『パターン・ランゲージ』

キーワード	関連条件	解決法	課題
○唐先学校	「生活学習」のテーマの多くは生活や自然と関わりあわせるように考えられる。決して学習やホールセンターで学ばないで済ませるべきではない。	店先、通学路等、思い通りの日常の学習ができるように仕向けること。	
●建物		●唐先学校のハードウェア [場所]	●唐先学校のハードウェア
●建物づくり		●美の基準	●近接学

Fig. 3-11 真鶴町の「美の基準」

芦原義信は『街並みの美学』*3で、街路空間のあり方についての考察を行っている。通りの幅とそれを規定する壁面の高さ——D/H*4によって通りのプロポーションを規定し、いくなれば街路空間のボリュームスタディの重要性を説いている。

街路空間の表層に現れてくる要素に着目したものと、記号学的なアプローチがある。街路空間の構成要素を分類、分析して、それらを組み合わせることで新たな計画に役立てようという試みだ。クリストファー・アレグザンダーはそのアプローチを徹底して行った理論家であり、著書『パターン・ランゲージ』*5 (1977) にて、街づくり、環境づくりのための253のパターンを示している。真鶴町の街並みをつくるための「美の基準」*6は、このアレグザンダーの考えに基づいたものである。設計組織ADHの真壁伝承館では、サンプリング・アンド・アセンブリングと称して、近隣の伝統建築物の構成要素をサンプリングして、それを再構成するという手法がとられている。表層に対する分析が、具体的なパブリック空間のデザインに落とし込まれた実例である。

4) 境界・アクセシビリティによるパブリック空間の記述

都市を歩いてみると、領域へのアクセスをコントロールする種々の境界があることに気づく。それはとりもなおさず、パブリック性のコ

*5 『パターン・ランゲージ——環境設計の手引き』
クリストファー・アレグザンダー著 平田翰那訳 鹿島出版会 1984



Fig. 3-12 真壁伝承館

*6 美の基準
1993年に制定された神奈川県真鶴町のまちづくり条例。1. 場所 2. 格付 3. 尺度 4. 調和 5. 材料 6. 装飾と芸術 7. コミュニティ 8. 眺め の8つのキーワードに基づき、基準が示されている。

ントロールに他ならない。

ジャンバチスタ・ノリ*7のローマ地図 (1748) は、アクセシビリティによって領域を分類、記述したものである。その場所が公に対して開かれた場所であれば白、そうでなければ黒という分類で、都市内の領域を白と黒の2色で塗り分けてある。道路や広場は白であるが、同様に教会も開かれた場所として白抜きとされている点がユニークである。すなわち、建築や道路というハードな構築物によってではなく、パブリック性によって記述された都市領域図である。誰にでも開かれているというパブリック性を、アクセシビリティに置き換えて表現したものとえよう。

また、小泉雅生はノリの地図の現代東京版となるアクセシビリティマップ*8を作成している。そこでは、ビジュアル・アクセシビリティとフィジカル・アクセシビリティの2軸に基づき、都市内の領域を9つの階調で表現し、各々の領域の境界についても分類を行っている。より複雑化した現代の都市空間のパブリック性を記述しようという試みである。

ここで描かれる地図は高所から見た領域図となるが、そこに記述されているアクセシビリティは、都市内の生活に根ざしたアイレベルでの視点によるものである。世界視線と普遍視線とが併せて示される独自の記述方法といえよう。

5) パブリック空間での心理の記述

さらに視点を人のサイドに移し、パブリック空間における人の振舞いや心理にかかわる記述を見てみたい。計画者としての上からの視点ではなく、あくまでアイレベルでの生活者・利用者の視点である。

パブリック空間においては、他者とのかかわりを意識せざるを得ない。それは少なからず心理的なプレッシャーとなり、他人との距離を計ることへと繋がる。エドワード・ホールは『かくれた次元』で近接学*9 (proxemics) を謳い、人びとの間で状況に応じた距離が保たれる様を示している。すなわち、パブリック性をもった空間が、人びとの心理や振舞いに影響を与えているのである。

一方で、人間の心理や振舞いがパブリック空間を規定するケースもあるだろう。そのようなデリケートな人間と空間との関係を扱ったものに、認知心理学で用いられるアフォーダンス*10という概念がある。人間が自然にある行動を起こすきっかけとなるような仕掛けのことで

*7 ジャンバチスタ・ノリ
Giambattista Nolli (1701-1756)
イタリアの建築家。ローマ教皇ベネディクトゥス14世の命により、ローマの地図を作成した。

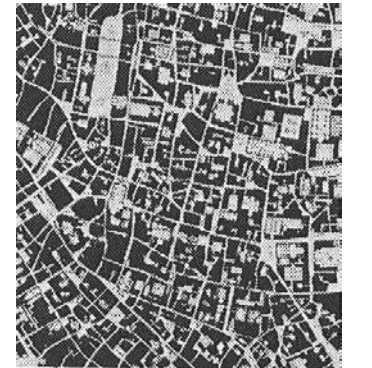


Fig. 3-13 ジャンバチスタ・ノリのローマ地図『On Streets』: Stanford Anderson MIT Press 1978



Fig. 3-14 アクセシビリティマップ
境界図によるアクセシビリティ (上) と、領域図によるアクセシビリティ (下)。

*8 新建築2008年6月臨時増刊『The MARUNOUCHI Book——Activity, Maps & Urban Architecture マルノウチ本』新建築社 2008

*9 近接学
空間や距離が個人に対して、どのような意味を持つのかを研究する学問。ホールは個人にかかわるパーソナルスペースを、パブリックスペース、ソーシャルスペース、パーソナルスペース、インティメイトスペースの4つのゾーンに分類している。

事例：1 戸田市立芦原小学校

宅地化が進むエリアの新設校（設計 小泉アトリエ）

1) 企画段階でのパブリック性

戸田市立芦原小学校は、JR埼京線北戸田駅の近くに建つ公立小学校、すなわち、官製の小学校である。これまで、周辺には配送センター等が立ち並び、搬出入の大型車両が行き交うような街であったが、駅周辺の土地画整理事業を経て、中高層のマンションが建ち並び住居地域として変貌しつつある。人口増が著しく、既存小学校の分離新設校として計画された。

芦原小学校は、この土地画整理事業における最初の公共建築となる。後日、設計を進めるに当たって、市長から「街をつくっていくに当たっては、まず人を育てることが必要だ。そのための学校建築である。単体の建築ではなく、人を育て、街をつくる視点で取り組んでほしい」との期待が設計

者に寄せられたが、このことからわかるように、行政サイドにこのプロジェクトにける強い意気込みがあった。すなわち、芦原小学校はこれから続くまちづくりの先導的な役割を果たすこととなる。新しい街におけるパブリック空間をどのようにとらえ具現化するのか、そしてそれがどのような街へと繋がっていくのか、時間軸と面的な広がりを持ったパブリック性が問われていたといえよう。

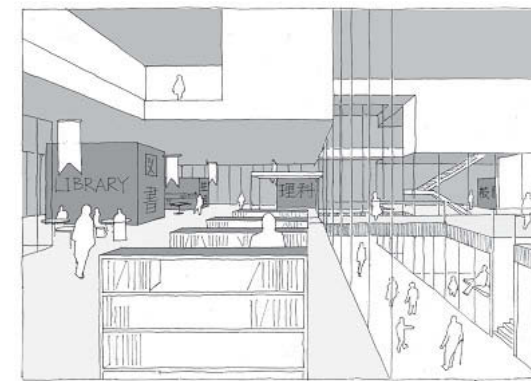
プログラムとしては、小学校に加えて、生涯学習施設と児童保育施設を併設することとなった。これは、地域住民を交えての市民懇話会で取りまとめられた基本構想に基づいたものである。いくつかの機能を複合させた複合建築（第1章 p33—参照）とすることで、敷地の有効活用を図るとともに、地域の核となることが目されていた。

北東からの全景



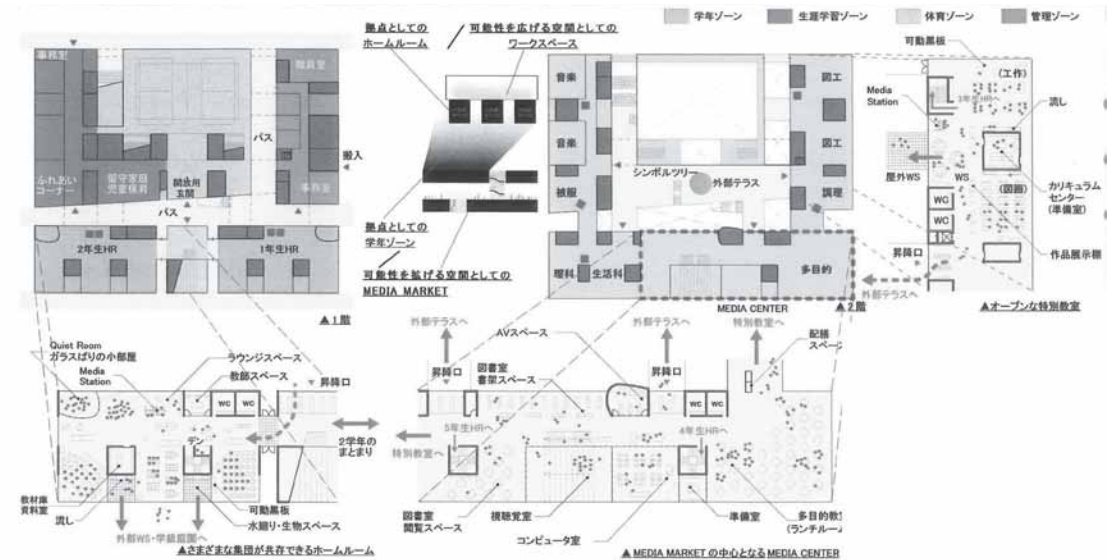
2) 設計プロセスにおけるパブリック性

こうしたまちづくりへの高い期待を具現化すべく、市では、設計者選定を公開プロポーザル方式で行うこととした。2001年秋にオープンプロポーザルが行われ、78者からの応募提案を受けている。その中から第2段階目に進む10者が選定され、市民の前での公開ヒアリングを経て、最終的にはシーラカンズアンドアソシエイツ（小泉雅生）案が最優秀に選ばれた。公開ヒアリングは戸田市役所で行われ、各者10分程度のプレゼンテーションと質疑応答がなされたが、同時に、別室で他の応募者の全提案が閲覧できるかたちとなっ



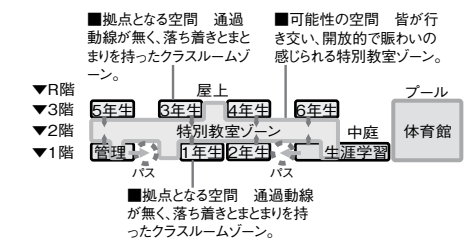
プロポーザル時のスケッチ（メディア・マーケット）

プロポーザル時の平面ダイアグラム

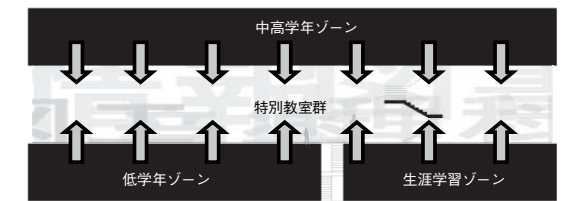


いた。設計者選定を含めて、設計プロセスを開いていく（第2章 p48—49参照）という市の姿勢がうかがわれた。

このような流れを経て、設計段階においても、市民参加のワークショップを行うなど、設計プロセスを開かれたものとするのが企図された。同じ設計者による千葉市立打瀬小学校の見学会を開催し、そこでの感想や意見をワークショップ形式で発表するといった試みがなされた。



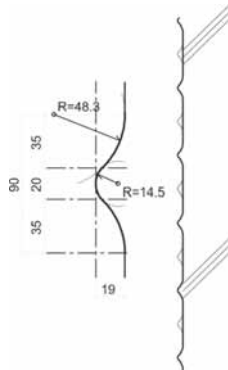
断面のダイアグラム-1



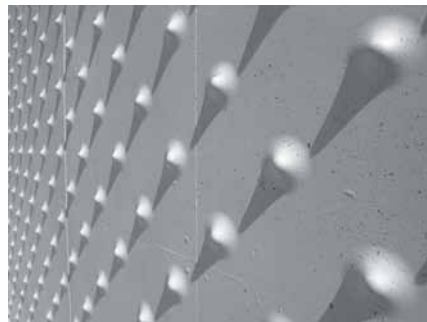
断面のダイアグラム-2



屋上ビオトープ 3階教室間テラス



外壁断面詳細図



外壁の突起



壁にもたれかかる子ども

■身体スケールと屋外空間

戸田市の街並みは高架のJR埼京線から見下ろされることから、建物の屋上面はもう1つのファサードとして位置づけられる。そのような観点から、芦原小学校でも屋上を積極的に緑化し、地域に開かれた屋外空間とする提案を行っている。さらに、大きな屋根面が周囲の景観の中で突出したものとならないよう、屋上面をパッチワーク状に構成し、周囲の屋根景観とスケール感をなじませるといった配慮も行っている。単体の建築であっても、街並みや景観を形づくる一要素である。アーバンデザインに参加するというパブリック性を意識した振舞いが設計者には求められる。

また、校舎棟の中央部には囲まれた中庭があり、教室間にはプランターの置かれた小さなテラスが確保されている。先述したパッチワーク状の屋上は、広い屋根面を小空間の集積として構成したものである。それぞれのスケールや場所の性格に応じて、そこで展開するアクティビティは異なっていく。

多様な行為を受け止められる包容力のあるパブリック空間であるためには、外部空間の多様性も重要である。

この建物の外壁には、市松状に小さな突起が付けられている。時刻に応じて影が変化し、建物が表情を変えていくことを意図したもののだが、同時に、この突起の緩やかなカーブには思わず手で触れてしまうような人を惹きつける力がある。建築が身体に近い存在となることで、すなわち建築と身体との距離を近づけることで、文字通り親しまれる建築となる。

このように、建築をアクティビティや身体スケールに応じてきめ細やかに考えていくことは、「パブリック空間とプライベート空間の境界」を位置づけることへと繋がる（第4章p96参照）。建築のスケールや表層にも意識を向けることで、建築や空間を身体感覚と同期させ、身体化していく。そういったプロセスを経て、人間と建築、個と全体、そしてプライベートとパブリックとの関係が構築されるのだ。

5) 運用段階でのパブリック性

このようなプロセスを経て、芦原小学校は2005年に竣工、開校した。先に述べたように、設計プロセスにおけるワークショップでは学校関係者が直接かかわることはかなわなかったが、期せずして、教育委員会内の打合せ担当者が初代校長となり、設計・建設プロセスの詳細を理解した上でのスタートが切られた。とはいうものの、他の教員は3月末に辞令を受けたばかりで、最初の1学期は新しい提案が盛り込まれた学校建築への戸惑いを感じられた。2学期以降、若手の教員がさまざまなスペースを積極的に使うようになり、それらに触発されるように、他の教員も学校建築を使いこなすようになった。

さらに戸田市では新たな枠組みとして、「戸田市立芦原小学校コミュニティ・スクール推進事業」と銘打って、地域住民が学校運営に積極的にかかわる取組みがなされている。

「パートナーシップでつくる地域の学校——学校・家庭・地域、それぞれの役割と支え合い——」をかかげ、学校と地域・家庭とが連携して学びの場を盛り上げていこうというスキームである。学校応援団と呼ばれる地域組織が立ち上げられ、その代表としてふれあい推進長が任命されている。ふれあい推進長は職員室内にデスクを持ち、ユニークな活動をしている地域住民をゲストティーチャーとして招くなど、学校と地域との橋渡しをする役割を担っている。いわば、地域側の学校代表といえよう。年間で延べ700回の事業が企画され、支援者総数も年間延べ4200人に及んでいる。まさに地域が支えるパブリック（第1章p23—参照）である。カフェとしても用いられるふれあいコーナーやパスでの雨宿り（第2章p69参照）など、建築的な配慮と運営上の工夫とがあいまって、地域に根ざしたパブリック空間として用いられている様子がうかがえる。

英語の授業参観



ゲストティーチャーによる安全授業

多目的教室での上演



雨宿りの機能も果たす開放パス